

KEY PERSON

インプット・アウトプット・ホンコン
(IOHK)

CEO兼共同創設者

チャールズ・ホスキンソン

Charles Hoskinson

イーサリアム元CEOが語る ブロックチェーンの可能性

2018年にバブルを引き起こした暗号資産（仮想通貨）だが、仮想通貨取引所に対するサイバー攻撃事件を発端としたセキュリティリスクへの懸念から、当時と比べ勢いは失った。しかしその裏で、基盤技術のブロックチェーンは着々と研究が進められ、国内でも実証実験などが活発に行われている。ブロックチェーンの本格的な実用化に向けた可能性、課題はどこにあるのか。イーサリアム元CEOのチャールズ・ホスキンソン氏に話を聞いた。



PROFILE

1987年11月生まれ、米コロラド州出身。メトロボリタン州立大学デンバー校、コロラド大学ボルダー校で解析的整数論を学び、その後、暗号化関連の業界に入る。仮想通貨関連のスタートアップ企業のインビクタス・イノベーションやイーサリアムを共同で創業。2015年にIOHKを創設し、CEOを務める。

取材・文／前田幸慧
report & text by Sachie Maeda
写真／松嶋優子
photo by Yuko Matsushima

きっかけは金融システムへの フラストレーション

— ホスキンソンさんはイーサリアムの共同創業者として知られていますが、そもそもなぜ仮想通貨やブロックチェーンに興味を持たれたのですか。

私の場合は、既存システムに対するフラストレーションが大きかったと思います。特に当時はiPhoneが目まぐるしく発展し、常に改善が見られた一方で、世界的な金融ネットワークについては、送金に何日もかかったり、手数料が送金額を上回ることがあったりと改善が見られず、フラストレーションを覚えていました。そこでプロトコルに関心を持つようになり、プロトコルベースのお金に興味を抱くようになったんです。

当時でも、大手IT企業や銀行などが新しいインフラを発表するなど研究はされていましたが、より分散化されたかたちを目指すオープンなプロトコルでも、どこか一つの企業が勝ってしまうたら独占権が続いてしまう。特にインターネットと比較した場合に悲観的にならざるを得なかつたので、オープンなスペースに期待して参入しました。

— 仮想通貨は一時期、投機的に売買され相場が非常に過熱しました。フェイスブックのリブランなどの影響でまたその兆しが見えていますが、そうした仮想通貨の状況については、どのように捉えていますか。

いろいろなタイミングを見てきましたが、激しい乱降下の中で、仮想通貨やブロックチェーンが持つ本当のポテンシャルが隠れがちなのは非常に残念です。実際に携わっている研究者の数や発表されているプロジェクトの内容をみると、19年は18年より伸び続けているところで、皆さ

んにもそれがもっと見えていいのに思っています。ただ投機的な対象としてだけでなく、自分のアイデンティティやお金の管理を歴史上初めて自分で完全に管理することができるという可能性の部分を、ぜひもっと見てもらいたいです。

時間はかかる 必ず日の目を見る

— ブロックチェーンの持つ可能性について、改めて端的にご自身の考えをお聞かせ下さい。

これまで多くの国や自治体のパイロットプログラムや実験に携わり、いろいろと興味深いことがありました。例えば、あるスイスの保険会社のケースでは、保険料の支払いに関して、ブロックチェーンを使って決済期間をどれだけ短縮できるかという実験を行ったところ、それまで10週間かかっていた保険料の支払いが1週間に短縮することができました。それ以外にも、サプライチェーンのプロセス改善の依頼を受けたりなど、ブロックチェーンは応用分野が広く、非常に多くのことが起こっています。

残念ながら今のこの業界の中では、急激に増減する仮想通貨の資産価値と、時間をかけた実際の設計と開発を通して世の中に対して変化をもたらすもの、相反する二つのものが存在していて、残念ながら前者の方が目立ってしまい、後者はあまり日の目を見ないところがあります。私はこれを新幹線がつくられるようなプロセスだと考えていて、10年20年と長い時間をかけて計画することで、偉大なインフラをつくることができると考えています。

— ブロックチェーンの普及に向けた課題はどこにあると思いますか。

仮想通貨をめぐるネガティブな要素が、もう一つの堅実にゆっくり前進しているブロックチェーンの世界に悪い影響をもたらすというのが、最大の課題かもしれません。

インターネットの黎明期もそうした課題があったかと思いますが、インターネットというのは、例えば検索や動画サイトといった非常に有益なツールが使える反面、悪用しようとすれば悪いこともたくさんできるし、個人情報の流出など多くの課題も残っています。こうした意味で、悪い使われ方をするから技術全体が悪いわけではなくても、どうしてもそういうイメージというのは実在します。

だからこそ多くの研究は表立ってはあまり行わらず、日本でも多くのパイロットプログラムが

進行していますが、あまり声を大にして発表しているわけではなく、実際にしている実験自体も小規模だったりするというのが実情です。

ただ、IBMなどの大手IT企業や金融関連企業など、多くの企業が参入してきているのは間違いないので、まだまだ時間がかかると思いますが、より価値が認められて努力が続ければ、絶対に芽が出ると思います。

ブロックチェーンを使った スマートシティ構想

— IOHKとしては、どのような取り組みに注力していますか。

モンゴルのウランバートルで実際にわれわれが着手しているプロジェクトでは、大気の測定にIoTとブロックチェーンを活用しようとしています。ウランバートルの大気汚染は非常に深刻で、特に汚染がひどくなる冬の時期は、人々はマスクをしないと外出しません。小児喘息など、呼吸器官系の病気にかかる子どもたちもいます。

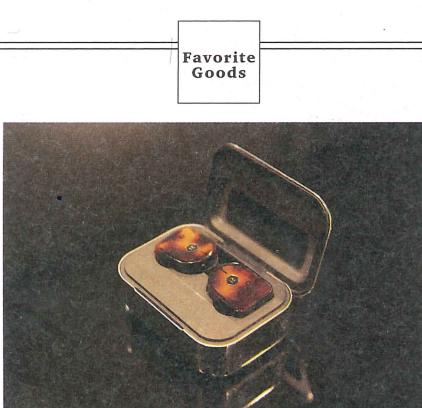
その中で、われわれはIoTデバイスを大量に使用した大気汚染データネットワークのようなものを構築しようとしています。これは非常に実用的かつ応用可能なパイロットになると思っていて、コストを低く抑えながら、国や民間の機関が保有するセンサーなどが相互的な関係性を維持するようなネットワークを構築しようとしています。こうしたことを行なう小企業が取り組んでつくること自体が非常に可能性を秘めていると思います。

これをうまく実用化することができれば、例えば水質汚染やエネルギー消費など、さまざまな種類のセンサーをネットワークに絡めて街全体をセンサーで管理し、さまざまなことを自動化できるスマートシティという構想が見えてきます。こうしたものをある程度確立できれば、中国やタイなど他のアジアの主要都市に対しても展開できるのではないかと考えています。

— そのプロジェクトはどのくらいの期間を見込んでいますか。

まず最初に必要な団体の設置や調査を行い、そこでパイロットを運用するかどうかの決定が行われますが、それが6ヶ月くらい。今がちょうどそうしたフェーズにあります。

そこからパイロット自体の運用が6ヶ月から1年くらいかかるものと考えています。最終的にプロジェクト自体の入札から実質的に運用されるレベルまでは短くとも3年、長ければもっとかかる見込みです。



Master & Dynamicの完全ワイヤレスイヤホンを愛用。「音楽を聴くために買ったが、マイクの質が良いので電話会議でもよく使う」とのこと。年間200日は出張で世界を飛び回るため、オフィス外での仕事のしやすさでも重宝している。

インプット・アウトプット・ホンコン (IOHK)

CEO兼共同創設者

チャールズ・ホスキンソン



世界でブロックチェーンの可能性を広める

ビットコインと並ぶ、代表的な仮想通貨として知られるイーサリアムの共同創設者であるホスキンソン氏。仮想通貨は今までこそ一般に知られるようになったが、「最初に参加したミートアップは私一人しかいなかつた」と、その存在が周知される前から業界に携わってきた。

「(ブロックチェーン技術が) 多岐にわたる業界・分野で応用可能なことが、起業家精神やモチベーションを高めてくれた」と、ホスキンソン氏は話す。

だからこそ、「仮想通貨やブロックチェーンが持つ本当のポテンシャルが隠れてしまったの

は非常に残念」という言葉に、仮想通貨が単なる投機対象とみなされがちで、置き去りにされた可能性の部分にもっと目を向けてほしいと願う気持ちがじんぐり見える。

IOHKを創設した現在は、エチオピアやモンゴルなどさまざまな国や自治体と共にプロジェクトを推進。世界を飛び回っているため、チャットや電話会議を駆使して「スマートフォンとイヤホンだけで会社を経営できる」と笑う。「今が業界として成長の時期」と、ブロックチェーンの新たな可能性を開こうと奔走している。

(インタビュー本編は26・27面)

The advertisement features a green background with several data visualizations. At the top right, a large bar chart shows monthly sales volume from January to June. To its left is a line graph with bars showing monthly sales volume and average unit price. Below these are two more bar charts: one for monthly sales volume and another for average unit price. The bottom section contains a line graph with markers, a pie chart, and a screenshot of the BCN Ranking-PRO software interface. Text overlays describe the service's features, such as market analysis, daily updates, and trial offers.